

EXPERIMENTAL FILM / VIDEO
image
forum
festival 2026

40TH IMAGE FORUM FESTIVAL

イメージフォーラム・フェスティバル 2026

11
/ 24 [火]
↓
11
/ 29 [日]

広島市映像文化ライブラリー

LIGHT SPIRITS: BODY, FILM, PERFORMANCE
映画祭

主催—イメージフォーラム
共催—広島市映像文化ライブラリー
協賛—株式会社ダゲレオ出版
助成—芸術文化振興基金
協力—在日フランス大使館／アンスティチュ・フランス

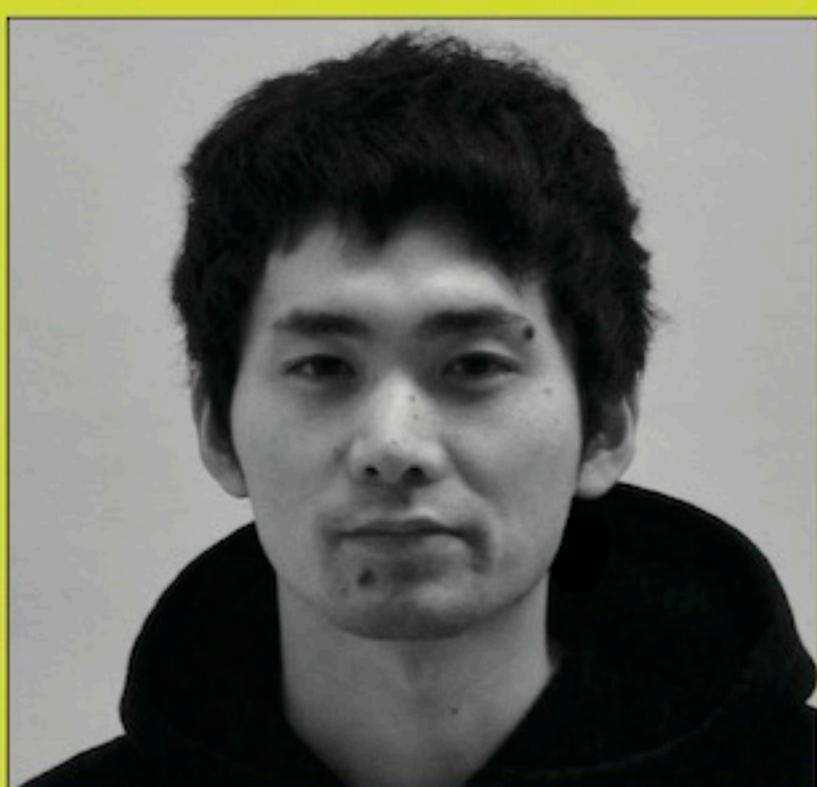
イラストレーション—近田春夫

東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション

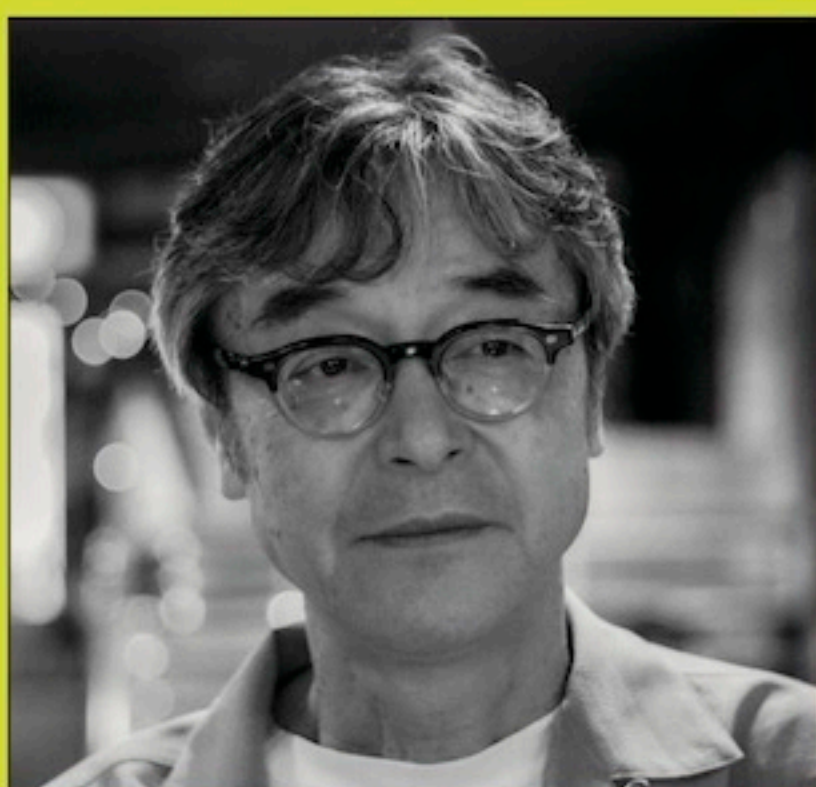
East Asian Experimental Competition

「東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション」は日本、中国、香港、マカオ、台湾、韓国の東アジア地域を対象とした公募部門であり、同地域出身または在住の作家による2025年以降に制作された映像作品を対象としています。本年は過去最多となる585作品の応募があり、厳正なる一次、二次審査を経て東アジアの「今」を映し出す注目作品20本がノミネートされました。また新設部門「ジャパン・エクスペリメンタル」には、同コンペティション一次審査通過作品より、日本作品5本が選出されました。最終審査は各分野から招聘した3名の審査員によって会期中に行われ、9月25日にシアター・イメージフォーラムで行われる授賞式で入賞6作品と観客賞を発表。詳細は公式サイトにて。

最終審査員



折笠良
ORIKASA Ryo
アニメーション作家 [日本]



樋口泰人
HIGUCHI Yasuhito
映画評論家 [日本]

大賞 1点	賞金30万円 + 賞状
寺山修司賞 1点	賞金10万円 + 賞状
優秀賞 3点	各賞金3万円 + 賞状
ジャパン・エクスペリメンタル賞 1点	賞金3万円 + 賞状
観客賞 1点	賞状



マリー・ロジエ
Marie LOSIER
映画作家、キュレーター [フランス]



A 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション1

5作品 | 94分 11/24 TUE 18:30

チャタギル・ポッターはかく語りき

Thus Spoke Chatergil Potter

ティン・チーウェン | TING Chi-wen | digital | 22min | 2026 | 台湾 | 死から蘇ったポッター神父は、人と人ならざるものの狭間で「この世」を見つめ直す旅に出る。生前告解室で他人の問いに答えを与えてきた神父が、肉体を失って「人間とは何なのか」という実存的な問いと向き合う。ファウンド・フッテージや生成AIの映像素材を巧みに織り交ぜ、「非人間」の視点も踏まえその問いを際立たせるポストAI・シュールリアリズム映画。

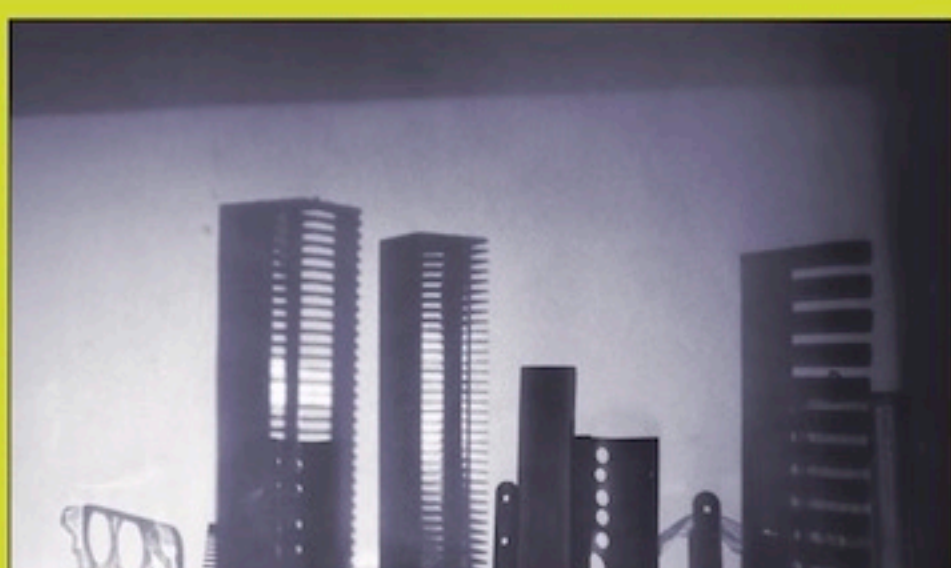


トークイベント—— 11/24 [火] 18:30の回上映後 ゲスト 門脇健路 [イメージフォーラム・フェスティバル ディレクター]

透明列車

Fly Train

リア・チャン・ルーウェン | Ria ZHANG Riwen | digital | 4min | 2025 | 香港 / 中国本土 | 車窓の外に広がる夜景に立ち並ぶビル影、疾走する列車の連続する明るい窓……。浮遊感のある夢が増殖し、映画の初源的イメージと近代都市の風景が交感しながら観客の記憶を刺激する。影絵を使ったハンドメイドな手法が、作品の世界観に情感を加える夢幻的ファントム・ライド。



シャオガオは結局一人で老いていく

Xiaogao gonna die LONELY

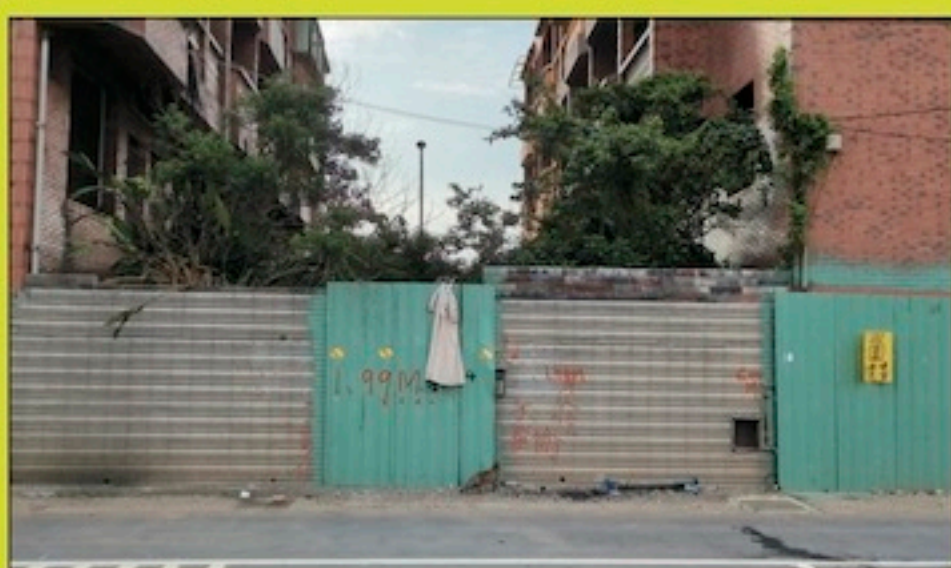
ガオ・ジュンイェン | Isabelle GAO | digital | 8min | 2025 | 中国本土 | いわゆる“ミレニアル世代”と“Z世代”の間で宙ぶらりんの主人公・シャオガオは、友人や家族、恋人との関係をこじらせながら、結婚や出産をめぐる社会からの重圧にもなんとなく押しつぶされそうで……。作者自ら監督&主演を務め、自身の経験を土台とした物語を、リズムカルで奇想天外な場面展開によってコミカルに描いた。



魔神仔がいる場所へ、それでも帰りたいの？

Well-Intentioned

チエン・マンチュン | CHIEN Man-Chun | digital | 30min | 2025 | 台湾 | 空港の拡張によって、亡き母との記憶が刻まれた実家を失うことになった作者。母の死と、時に人をさらうという台湾の妖怪「魔神仔(モシナ)」のイメージが重なる。ノート、母の服、作者による絵画など、母の不在を映し出すものを通して、作者の喪失感や残された父との関係が綴られる。プライベートドキュメンタリーの秀作。



緑の親玉

Boss of Green

蒂谷有理 | OBITANI Yuri | digital | 30min | 2026 | 日本 | 1990年代より個人映画の分野でユニークな実験的作品を発表してきた蒂谷有理の最新作。街角でトイピアノを弾き“テンテン”を探す男に邂逅した「私」は……。作者の代名詞といえる作り込まれた音像と全編主観ショットで貫かれ、観客を奇妙な日常世界へといざなっていく。田畑を突っ切る一本道のロングテイクに注目。



B 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション2

5作品 | 90分 11/27 FRI 16:00

月世界のアマチュア

Amateur in the Moon

ホアン・パンツアン + リン・ジュニー | HUANG Pang-chuan + LIN Chunni | digital | 22min | 2025 | 台湾・日本 | アマチュア映画作家・吉川速男がフリッツ・ラングの『月世界の女』に触発され、SF映画制作を志すというエピソードを軸に、戦前の日本と台湾のアマチュア映画の世界を描く。作品の多くは戦火で失われたが、本作の二人の作家は復刻された9.5ミリフィルムで全編を撮影。小型映画にかけた青年たちの情熱を鮮やかに蘇らせる。



宵星の歌

Singing of the Evening Stars

アイリス・サン | Iris SANG | digital | 23min | 2026 | 中国本土 | 夜のロサンゼルスをさすらう男。その耳に響き始める鳥の声は、やがて街の光を小鳥の群れへと変えていく。かつてこの地に広がっていた大自然は、いまやビル群の下に消えた。鳥の歌は、失われた風景の記憶を呼び覚まし、この土地に刻まれた歴史を静かに浮かび上がらせる。都市と自然、現在と過去が交錯する幻想的な映像詩。



走

走(zǒu)

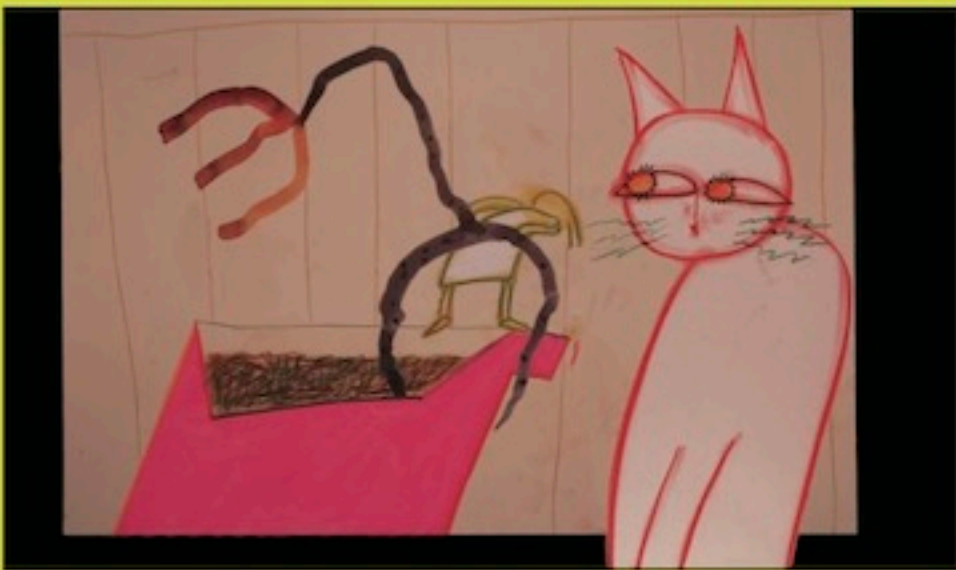
ウー・ハナ | Hannah WU | digital | 4min | 2025 | イギリス / 台湾 | 母親の古い中英辞典から「走(歩く)」という文字をめぐる思考が始まる。インクの描線やフィルムへのダイレクトペイントによって、「走」という文字や、想起されるイメージが次々と現れ、歴史的な意味から個人的な記憶まで、様々な姿を変える。言葉とイメージの間をさまよいつつ、世界を知ることについて思索する実験的作品。



新しいうちにチュ!

Mwah to My New House!

● 幸洋子 | YUKI Yoko ● digital ● 11min ● 2025 ● 日本
● 災害により家と飼い猫を失うかもしれないという不安に包まれていた幼少期の記憶を元にした作品。児童文学を思わせる台詞回しと軽快で賑やかな物語の展開に、イラストや切り絵など多彩な手法を織り交ぜる作者独自のスタイルが見事にマッチしている。手作業の温もりに満ちたアニメーションに猫への深い愛情があふれて見える。



風隙

Wind Gap

● チョンルー・シンユエン | ZHENG LU Xinyuan ● digital ● 30min ● 2026 ● 中国本土 ● 情性で付き合っていたパートナーとの間で予期せぬ妊娠をしてしまったミンは、中国ベトナム国境を目指してひとり当てもなく旅に出る。霧深い山間地帯で夢と現の間を彷徨う主人公の寄る辺なさを、全編広角カメラの特徴的なロングショットで捉えた。現代中国社会に生きる若者の心の機微を描いた、オフビートなロードムービー。



東アジア・エキスペリメンタル・コンペティション3

5作品 | 86分

11/27 FRI 18:30

録画

Recording

● チャン・モーイン | ZHANG Moying ● digital ● 12min ● 2026 ● 中国本土 ● 親に言われるがまま一流大学の前で将来の進学を誓う、年端もいかぬ女の子たち。子の幸せを願う親が思い出に残したはずのホームビデオが、子の視線を介して、親のエゴやその背後に潜む社会構造を映し出すアーカイブと化す皮肉。作者自らの幼年期のホームビデオを編集した本作は、ブラックユーモアか、子のさやかな復讐か。



リキュール

Liquor

● イーチェン・ホアン | Yi-Chen HUANG ● digital ● 5min ● 2025 ● ドイツ／台湾 ● 病に侵された母を救うため、娘は母の体内から出たへその緒でできた巨大なストローで、母の頭の中に溜まった水を取り出そうとする。しかし、母の姿は消え、娘自身が水の中へと沈み、記憶の海をさまようことに。母と娘との関係を想像力豊かに、力強いイメージで描いた作品。2026年オーバーハウゼン国際短編映画祭上映作品。



雲は過ぎ去り雨は降らず

Where Clouds Once Formed

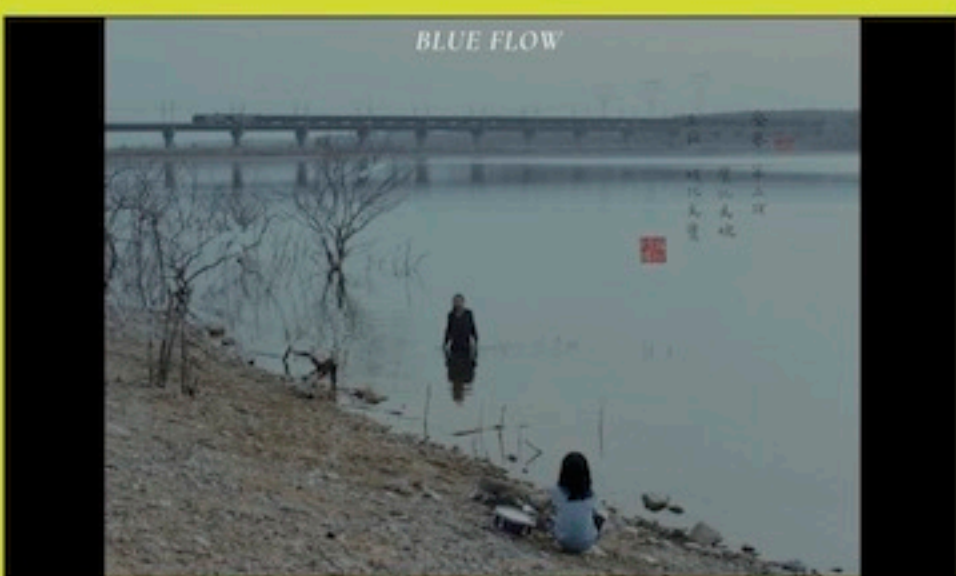
● スー・ユーシン | SU Yu Hsin ● digital ● 14min ● 2025 ● 台湾 ● 自動運転の車から撮影される、AI処理と半導体生産の地となったアリゾナの砂漠の風景。そこに広がるのは水の無い自然環境に生まれた、水を大量に消費する産業が形づくった非現実的なテクノ・ユートピアだ。サウンドトラックに重ねられた砂漠の民トホノ・オードム族の雨乞いの歌が、人間の叡智とは何かを問いかける。



曲水

Blue Flow

● シェン・リンズー | SHEN Linzi ● digital ● 21min ● 2026 ● 中国本土 ● 同じ川辺を舞台に、1952年、1983年、1995年という異なる時代を生きる人々を描く。長回しの横移動撮影によって時間を運ぶ絵巻物のように風景が展開し、川へ飛び込む女性と一匹の魚のイメージが時代を超えて記憶をつないでいく。『蘭亭序』の引用もまた、悠久の時の流れと人生の儚さを静かに浮かび上がらせている。



蟲のいどころ

Creep Beneath the Earth

● 山田沙奈恵 | YAMADA Sanae ● digital ● 34min ● 2026 ● 日本 ● 地震をもたらすとかつて信じられていた鯰は、復興の希望の象徴としても扱われてきた。閉塞感とカタストロフィーの予感が両義的に満ちる現代日本社会の感覚を〈災害と復興〉の政治学を通して描出する饒舌なエッセイフィルム。人間的スケールを超えた地学的・歴史的なマクロな視点は、本作家のIFF2018ノミネート作品『With Friction, As Friction.』とも共通する。



東アジア・エキスペリメンタル・コンペティション4

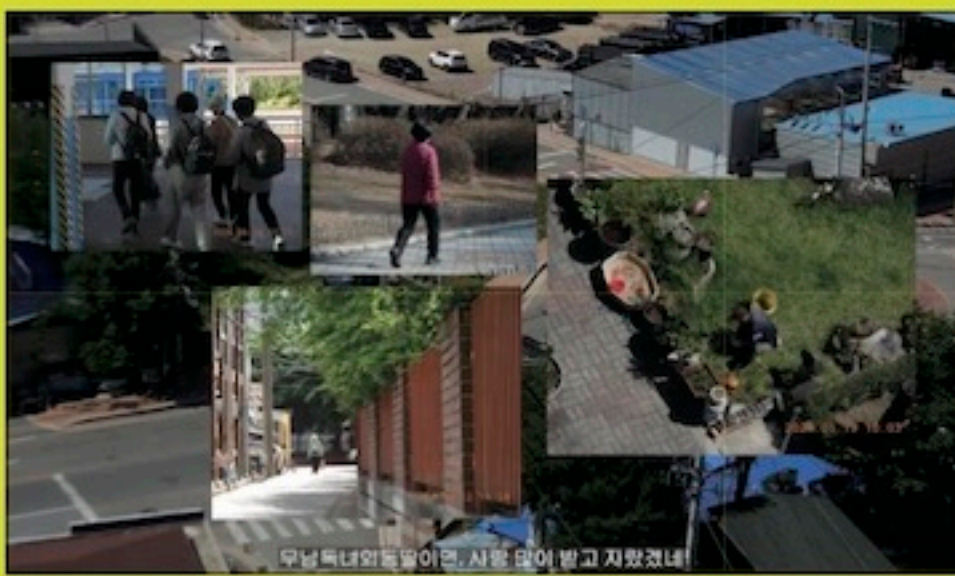
4作品 | 85分

11/28 SAT 11:00

韓国で一番おもしろいホームビデオ

Korea's Funniest Home Videos

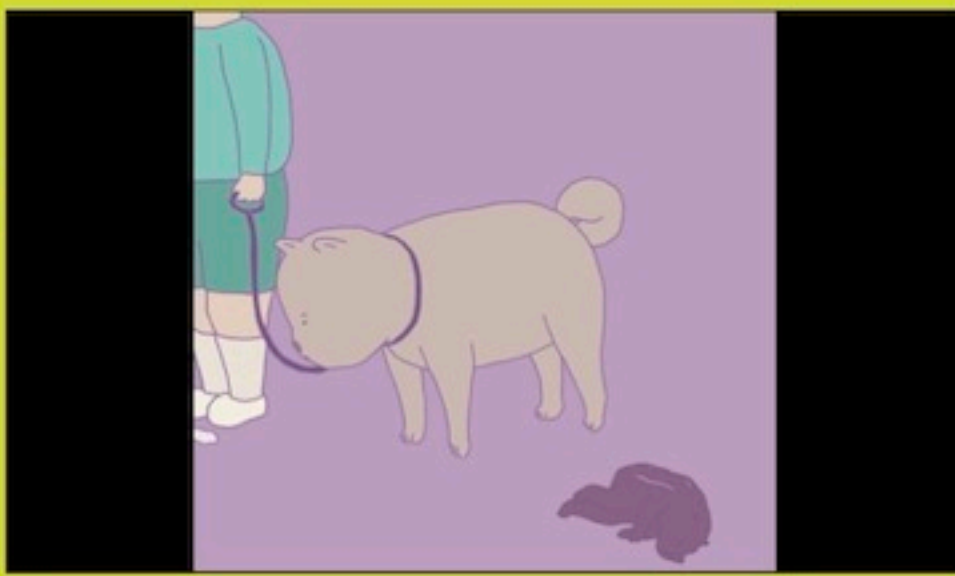
● キム・クッキ | KIM Guki ● digital ● 15min ● 2025 ● 韓国 ● “ホーム”が、まともにも存在しなかった生い立ちの作者。あえてホームビデオを撮ろうと決意し「唯一の家族」である祖母に会いに行く。イメージの不在を、購入した2010年代の中古デジタルカメラの粗い映像と生成AIで埋めていく。SNS投稿文化のフィルターにかけ、極めてパーソナルな個人の物語が“ストーリー”化され2010年代以降のメディア史と反響する。



ちいさなうりぼう

little boarlet

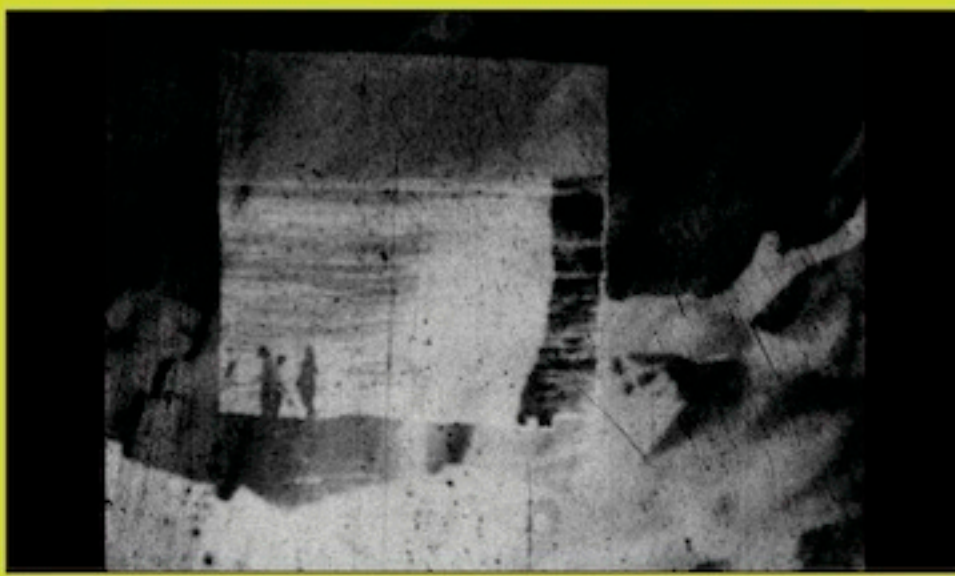
● 和田淳 | WADA Atsushi ● digital ● 4min ● 2026 ● 日本 ● 世界の四大アニメーション映画祭にノミネートされるなど、国際的に活躍するアニメーション作家・和田淳の新作。独特の「間」と、心地よい動きは本作でも健在だ。走ってはものにぶつかっていく「うりぼう」に、散歩中の犬、組体操の少年たち、コンビニでもめる人々などが絡み合い、日常の風景は奇想天外に変貌していく。



赤地をゆく牛たち

Redland Hooves

● カイウエン・レン | Kaiwen REN ● digital ● 27min ● 2025 ● 中国本土 ● 夜の暗がりに浮かび上がる動物や人影、失われた人の気配を感じさせる室内の風景——。色調の抑えられた16ミリフィルムのフッテージに、白光が歌うかつての中国の流行歌『魂繫舊夢』や様々なノイズ音がコラージュのごとく重ねられる。私信のような欠落したテキストの断片が、不安に満ちた複雑な情感を呼び起こす。



コンパクト・ディスク

Compact Disc

● リコ・ウォン | Rico WONG ● digital ● 39min ● 2026 ● イギリス／香港 ● 香港民主化デモに当時16歳で参加し逮捕された青年たち。月日を経て親友同士再び集まった彼らは、自分たちにカメラを向け、当時の記録を収めたコンパクト・ディスクを再生する。しまい込んでいた記録／記憶を直視することの困難と向き合い、移ろいゆく社会と若者たちの現在地を率直に提示した、パーソナルなドキュメンタリー。



東アジア・エキスペリメンタル・コンペティション5

1作品 | 92分

11/29 SUN 11:00

オー・バレンタイン

Oh, Valentine

● ホン・ジンフォン | HONG Jin-hwon ● digital ● 92min ● 2025 ● 韓国 ● 2004年2月、韓国現代重工業で下請け労働者バク・イルス氏が焼身自殺を図った。経済危機の余波で急増した非正規雇用をめぐる労働争議が激化する中、彼の死は更なる闘争を引き起こした。韓国美術家賞2026にも選出され注目される作者が、IFF2022受賞作『メルティング・アイスクリーム』に続く最新作として発表。碎かれた革命のその後を見つめる。



F

ジャパン・エクスペリメンタル

Japan Experimental

5作品 | 109分

11/29 SUN 16:00



feeling together 共在

feeling together

● ふくだべろ | fukudapero ● digital ● 25min ● 2026 ● ルワンダ / 日本 ● 暗闇の中、怒号と悲鳴が沸きあがる。激しく罵り殴り合う男女へと向かっていくカメラ。騒動は周囲の村人を巻き込んで広がっていくように見えるが、やがて諍いの当事者は歌い出し、怒りが集団の踊りへと伝染していく。強烈なワンショットの映像を通し、撮る者と撮られる者、そしてそれを見る者＝観客がとり結ぶ関係性について問いかけるドキュメンタリー。



眠る眼

Sleeping Eyes

● 宮川卓也 | MIYAKAWA Takuya ● digital ● 12min ● 2026 ● 日本 ● 空から舞い降りてくる黒い物体は、“モノリス”ならぬスマートフォンである。現代社会を侵食する視覚情報の洪水に、読む・見ることの自由を奪われた人間は、やがてその身体さえも記号化され、デジタル変換されていく。ゲームエンジンや3Dキャプチャ、視線追跡技術を用い、日常の風景を風刺的に描き出すことに挑戦した。



エクスペリメンタル・パノラマ

Experimental Panorama

G

マリー・ロジェ特集

——アンダーグラウンド・スーパースターズ

Marie LOSIER: Underground Superstars

〔共催〕東京日仏学院＋イメージフォーラム

名だたる伝説のアヴァンギャルド・アーティストやパフォーマーたちを愛情込めて、ポップでキッチュな世界観で描き出した作品で知られるマリー・ロジェ。カンヌやベルリン映画祭、MoMAやボンビドー・センターでも特集が組まれ、注目されているマリー・ロジェの型破りでエネルギッシュな映画の数々を堪能できる特集。東京日仏学院と共同開催で主要作品をほぼ網羅する、本邦初の大規模レトロスペクティブ！

私の人生における最も素晴らしい出会いが、型破りなアーティストたちを描いた私の伝記映画のインスピレーションの源となっています。その作品は、常にその人物との共同作業を通して作り上げられるのです。私にとって身体とは、とても特別な存在です。あらゆる身体に惹かれますが、それだけではありません。痛みや脆さ、傷跡、変容、そしてさまざまなジェンダーにも心を動かされます。完璧に美化されたものよりも、そうしたもののほうが、私にはずっと語りかけてくるのです

——マリー・ロジェ

G

ピーチズ・ゴーズ・バナナズ

Peaches Goes Bananas

1作品 | 74分

11/28 SAT 16:00

ベルリンを拠点とするエレクトロポップ・ミュージシャン、パフォーマー、クィア・フェミニスト・アイコンのピーチズ (Peaches) を17年間追い続けた生々しいエネルギーに満ちたポートレート。自らと被写体との関係の変化を作品へと昇華するマリー・ロジェ。本作は、そのドキュメント・スタイルの到達点とも言える一本である。二人のアーティストの邂逅から生まれる情熱と創造のエネルギーが、鮮やかにフィルムへと刻まれている。ヴェネツィア国際映画祭「ヴェニス・デイズ」部門招待作品。



ピーチズ・ゴーズ・バナナズ

▶ ピーチズ・ゴーズ・バナナズ | Peaches Goes Bananas ● 出演 ピーチズ ● digital ● 74min ● 2024 ● ベルギー・フランス



Our Times

Our Times

● ソネソラ | SONE Sora ● digital ● 10min ● 2026 ● 日本 ● フィルムの多重露光による撮影が、青空と緑に包まれた平穏な風景の中で行う登場人物たちの行為に小さなズレを生んでいく。そのズレは日常の新しい“別の”可能性を示すのか、あるいは繰り返される日常という逃れられない限界を示すのか。ポエティックなテキストとアナログフィルムの温かい手触りで綴られる、現実に対する希求。



冬の実

My Winter Berry

● 竹原結 | TAKEHARA Yu ● digital ● 9min ● 2026 ● 日本 ● 認知症になった祖母と過ごすさやかな日常が、写真や映像を織り交ぜた暖かなアニメーションで綴られる。「記憶とともに愛情も消えてしまうの？」少しずつおぼろげになってゆく祖母の世界に、「私」の居場所を探し求める。同作者のIFF2023ノミネート作『mom is どこ』から一貫し、記憶や家族をめぐる主題を丁寧に表現した。



Teteu

Teteu

● 磯部和弥 | ISOBE Kazuya ● digital ● 53min ● 2026 ● 日本 ● インドネシアの西スマトラの森に生きる少年“ジャブジャブ”を静謐な映像で追うドキュメンタリー。森と共生する伝統的な生活を選ぶ先住民たちは、外からの開発による影響を受け、否応ない変化へと巻き込まれていく。都市へ出て学校に通う少年の姿と、森での暮らしの様子が端正なモノクロとカラーの映像で対比される。



J

ラディカル・アマチュアリズム

——ユーゴのアンダーグラウンド・シネクラブ

Radical Amateurism: The Yugoslav Cine-Club Underground

10作品 | 81分

11/26 THU 16:00

「反・映画」「アマチュアリズム」を掲げ、世界初の実験映画祭が開催されていた旧ユーゴ。そのアンダーグラウンド精神あふれる作品集のセレクション。60年代、ニューヨーク、パリではなく東ヨーロッパ、今はもう存在しない国＝ユーゴスラビアで、アンダーグラウンド映画が花開いていた。ザグレブで1963年に開催されたGEFF(ジャンル映画祭)は、世界初の実験映画祭とも言える。そこは映画作家、理論家、芸術家、科学者たちが集まり構造映画と政治的挑発が熱狂的にぶつかり合う交差点だった。



旅

- ▶ アントニーの壊れた鏡 | Anthony's Broken Mirror ● ドウシャン・マカヴェイエフ | Dušan MAKAVEJEV ● 16mm(デジタル上映) ● 11min ● 1957 ● ユーゴスラビア
- ▶ 庭 | The Yard ● ミホヴィル・パンシーニ | Mihovil PANSINI ● 16mm(デジタル上映) ● 13min ● 1963 ● ユーゴスラビア
- ▶ 円 | Circle ● トミスラフ・ゴトヴァツ | Tomislav GOTOVAC ● 16mm(デジタル上映) ● 8min ● 1964 ● ユーゴスラビア
- ▶ ゲーム | Game ● カルポ・ゴディナ＋ユーレ・ベルヴァニエ | Karpo GODINA & Jure PERVANJE ● 8mm(デジタル上映) ● 6min ● 1965 ● ユーゴスラビア
- ▶ I'm Mad ● イヴァン・マルティナーツ | Ivan MARTINAC ● 8mm(デジタル上映) ● 5min ● 1967 ● ユーゴスラビア
- ▶ タブラ・ラサ | Tabula Rasa ● ニコラ・ジュリッチ | Nikola ĐURIĆ ● 16mm(デジタル上映) ● 9min ● 1969 ● ユーゴスラビア
- ▶ 旅 | Journey ● ボヤナ・ヴヤノヴィッチ | Bojana VUJANOVIĆ ● 8mm(デジタル上映) ● 2min ● 1972 ● ユーゴスラビア
- ▶ H ● ヴィエコスラフ・ナキッチ | Vjekoslav NAKIĆ ● 16mm(デジタル上映) ● 4min ● 1972 ● ユーゴスラビア
- ▶ 有効期限 | Izdah ● イヴァン・オブレンフ | Ivan OBRENOV ● 16mm(デジタル上映) ● 14min ● 1976 ● ユーゴスラビア
- ▶ 叫び | the Scream ● イヴコ・シェシッチ | Ivko ŠEŠIĆ ● 16mm ● 9min ● 1978 ● ユーゴスラビア

K | コレクティーボ・ロス・イングラビドス

——儀礼、トランス、抵抗の彼方へ

Colectivo Los Ingrávidos: Ritual, Trance, beyond Resistance

「マテリアリスト神秘主義」と「反植民地主義」を掲げるメキシコ拠点のコレクティブ、本邦初特集！

メキシコ拠点のコレクティーボ・ロス・イングラビドス(Colectivo Los Ingrávidos)は、国家、資本、マスメディアが形成してきた支配的な映像のあり方を問い続け、2012年にプエブラ州テワカンで結成された。16ミリフィルムやデジタル映像、ファウンド・フッテージ、詩、音響、先住民文化や神話などを重層的に組み合わせながら、これまで500本を超える作品を発表し、政治、身体、儀礼、歴史、記憶をめぐる独自の映像実践を展開している。本特集では、MoMA、ロッテルダム国際映画祭、e-flux Screening Roomなど、国際的な映画祭や美術館・文化機関で注目を集める彼らの代表作を通して、そのラディカルな映像世界を紹介する。

キュレーション 熊澤隆仁(deepbluesea)・中西香南子・新谷和輝

Curated by KUMAZAWA Takahito, NAKANISHI Kanako, NIIVA Kazuki

K₁ | サン・カルテット

The Sun Quartet

1作品 | 61分

11/28 SAT 14:00

『サン・カルテット』は、アヨツィナバ学生失踪事件を起点に、1968年トラテロルコ虐殺から植民地主義の暴力まで、メキシコに刻まれた歴史の亀裂を照射する四部作。即興音楽、詩、抗議運動の記録、多重露光を重ね合わせながら、国家が独占する歴史の語りに抗う映像実践を提示する。

サン・カルテット パート1——太陽の石

サン・カルテット パート2——サン・ファン川

サン・カルテット パート3——動乱

サン・カルテット パート4——11月2日／アヨツィナバから遠く離れて



サン・カルテット

▶ サン・カルテット | The Sun Quartet ● 16mm(デジタル上映) ● 61min ● 2017 ● メキシコ

K₂ | イングラビドス作品集

Selected Shorts

5作品 | 69分

11/25 WED 18:30

儀礼や神話、政治運動、記憶を横断する短編集。メソアメリカの身体性やリズムを映像化した『狂乱の大地』を軸に、ジョナス・メカスのナレーションを織り込んだ作品、太陽信仰を題材とした作品などを上映。フィルムの物質性と政治性が交錯する、ロス・イングラビドスの映像実践の広がりを提示する。



狂乱の大地

- ▶ 太陽のダンス | Danza Solar ● 16mm(デジタル上映) ● 4min ● 2022 ● メキシコ
- ▶ 狂乱の大地 | Tierra en Trance ● 16mm(デジタル上映) ● 38min ● 2022 ● メキシコ
- ▶ デジャヴのためのノート | Notes for a Déjà Vu ● 16mm(デジタル上映) ● 22min ● 2021 ● メキシコ
- ▶ 闘争 | Batalla ● 16mm(デジタル上映) ● 4min ● 2019 ● メキシコ
- ▶ ブラック・ファイアー・サン | Black Fire Sun ● digital ● 1min ● 2025 ● メキシコ

フィルムメーカーズ・イン・フォーカス

Filmmakers In Focus

N | シュルレアリスムの王国

——追悼・金井勝

The Kingdom of Surrealism: A Tribute to KANAI Katsu



2026年4月に逝去した映像作家・金井勝は、劇映画やドキュメンタリーといった既存のジャンルを自在に横断しながら、独創的な映像表現を切り拓いた。“見手との勝負”を信条に、縦横無尽に発想された作品世界は、日本の実験映画、個人映画の重要な軌跡として、今日なお多くの映像作家に刺激を与えている。

N₁ | 追悼・金井勝——① 無人列島

1作品 | 55分

11/29 SUN 14:00

「微笑う銀河系」三部作の第1作「人の巻」。教会を脱走した少年「日出国」は、尼僧たちの追跡から逃れながら成長していく。戦後日本の象徴でもある主人公は、金井自身の投影でもある。自らの体験と戦後史に様々な妄想が絡み合う、新しいシュルレアリスム映画。



無人列島

▶ 無人列島 | The Desert Archipelago ● 35mm(デジタル上映) ● 55min ● 1969

広島特別プログラム

Special Hiroshima Screening

Q | 広島特別プログラム

Special Hiroshima Screening

3作品 | 65分

11/24 TUE 16:00 | 11/25 WED 16:00

- ▶ 凧 | Kite ● 松本俊夫 | MATSUMOTO Toshio ● 16mm ● 30min ● 1976 ● 日本
- ▶ 絵馬 | Ema ● 松本俊夫 | MATSUMOTO Toshio ● 16mm ● 30min ● 1982 ● 日本
- ▶ 猫と少年 | Boy with Cat ● ドナルド・リチャー | Donald RICHIE ● 16mm(デジタル上映) ● 5min ● 1966 ● 日本



猫と少年

トークイベント——11/24[火]16:00の回上映後 ゲスト 門脇健路[イメージフォーラム・フェスティバルディレクター]

インスタレーション

Installation

映画は時間の芸術だと言われるが、時間に関する様々な制度に縛られるものでもあった。映画前史を題材とした映画『フィルム・ビフォー・フィルム』から40年。本作に登場する「時間を映す幻燈」をヒントに制作。上映時間から解放された配信の映画と、時間に拘束されたかつての“映画”との関係を考察する試み。



映画史(インターネット以前)

▶ 映画史(インターネット以前) | Film History(Before the Internet) ● 伊藤隆介 | ITO Ryusuke ● ミクストメディア ● 2026 ● 日本

L | ラスト・ムーヴィーズ 最後の映画

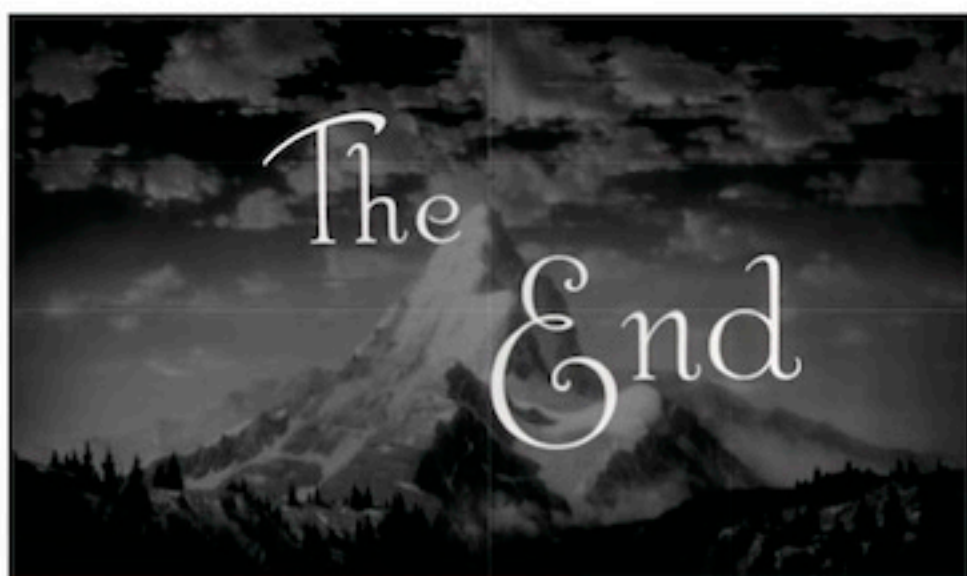
Last Movies

1作品 | 74分

11/26 THU 18:30

カフカ、ケネディ、バゾリーニ、キューブリック…。彼らが死ぬ直前に観た映画はなんだったのか？そしてそれらを繋げる糸とは？徹底したリサーチと読解力で、歴史を彩る著名人たちが観た「最後の映画」の陰謀史が綴られる。

そこにある繋がりには偶然かあるいは必然か。あらゆる映画には、やがて死を迎える者たちの不滅の光が宿っているだけでなく、台本がない人生を紡ぐ糸が織り成されている。本作品は間も無く幽霊になる者と、スクリーンの向こうの電気の亡霊たちとの最後の交感を捉えた驚異のカatalogである——アラン・ムーア



ラスト・ムーヴィーズ 最後の映画

▶ ラスト・ムーヴィーズ 最後の映画 | Last Movies ● スタンリー・シュティンター | Staley SCHTINTER ● ナレーション ジェレミー・アイアンズ ● digital ● 74min ● 2026 ● イギリス

40TH IMAGE FORUM FESTIVAL

イメージフォーラム・フェスティバル2026

氾濫する映画

LIGHT SPILLS: BODY, FILM, PERFORMANCE

1 1987年にスタートしたイメージフォーラム・フェスティバルは40回目を迎えます。本フェスティバルが「映像が『個人の表現メディア』となること」を謳って始まった当時、映像を作り、発表することは特別な行為でした。しかし、今や誰もがスマートフォン一台で映像を撮影し、編集し、世界へ発信することができます。映像表現はかつてないほど身近なものになりました。その結果、一つひとつの映像に向き合い、その力を受け取るということは、以前とは少し違うものになっているのかもしれません。では、そんな時代になぜ映像をつくるのか。このフェスティバルでは、現在の映像を取り巻く環境や既存の表現に安住せず、創造のパワーを氾濫させ続ける作り手たちに注目します。彼らと観客のみなさんとの間に散る火花の先に、これからの映像表現の可能性を見つけないと思います。

タイムテーブル

	11/24[TUE]	11/25[WED]	11/26[THU]	11/27[FRI]	11/28[SAT]	11/29[SUN]
11:00	—	—	—	—	D 東アジア・ エクスペリメンタル 4 [85min]	E 東アジア・ エクスペリメンタル 5 [92min]
14:00	—	—	—	—	K₁ イングラビドス 1 [61min]	N₁ 追悼・金井勝 1 無人列島 [55min]
16:00	Q 広島特別プログラム [65min] *上映後トーク	Q 広島特別プログラム [65min]	J 旧ユーゴ 地下シネクラブ [81min]	B 東アジア・ エクスペリメンタル 2 [90min]	G マリー・ロジェ長編 [74min]	F ジャパン・ エクスペリメンタル [109min]
18:30	A 東アジア・ エクスペリメンタル 1 [94min] *上映後トーク	K₂ イングラビドス 2 [69min]	L ラスト・ムーヴィーズ [74min]	C 東アジア・ エクスペリメンタル 3 [86min]	—	—

入場料[消費税込]

- 大人380円 | シニア(65歳以上)高校生180円 | 小中学生無料
- * 土曜は高校生無料
- 各回定員100名。発券・開場は各回45分前から

MAP



広島市映像文化ライブラリー
Hiroshima City Cinematographic and
Audio-Visual Library
広島市南区松原町9-1 エールエールHIROSHIMA 10階
TEL: 082-298-0551
<https://hiroshima-eizoubunka.jp/>



イメージフォーラム・フェスティバル2026事務局
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-10-2 | TEL 03-5766-0116

www.imageforumfestival.com



広島市映像文化
ライブラリー
Hiroshima City Cinematographic and
Audio-Visual Library

